

科目区分（教科または教職科目），授業科目名（教職課題特講Ⅱ）

担当教員：白松賢・山崎哲司

## 専門的知識を用いた考察のできる学習者へ

学校教育講座・白松 賢

### I. 授業内容及び構成

#### 【授業内容の概要】

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 トピック：少年問題とは何か？
- 第3回 地域の大人になにができるか？  
（新居浜守ってあげ隊 GPM）
- 第4回 学校教育における生徒指導の現代的課題
- 第5回 青少年のインターネット犯罪とその現状（愛媛県警察本部）
- 第6回 少年非行・少年問題の変化と生徒指導（愛媛県警察本部）
- 第7回 学校における不審者対策に向けて（愛媛県警察本部）
- 第8回 薬物乱用防止教室・非行防止教室の実際（愛媛県警察本部）
- 第9回 子どもたちの問題と向き合う教師へ
- 第10回 子どもたちの問題と向き合っ  
て（児童自立支援施設）
- 第11回 いじめの予防策 ～スウェーデンのいじめ対策～
- 第12回 子どもたちの＜問題＞と向き合う教師1（ポスターセッション準備）
- 第13回 子どもたちの＜問題＞と向き合う教師2（ポスターセッション発表前半）
- 第14回 子どもたちの＜問題＞と向き合う教師3（ポスターセッション発表後半）
- 第15回 まとめ ～フリートークで考えよう～

### II. 省察1～目的及び到達目標～

本講義は、現在の若者・少年問題の現状から出発し、学校とは異なる場で子どもの＜問題＞と向き合っている方々の講話や実

践を学び、問題解決に向けた意欲・態度とともに、実践的な指導力を育成することを目的としていた。講義の内容は現実の小中高等学校においても外部講師に委ねられることが多く、教育現場に不足している領域である。また、「脅しの教育プログラム」（ダメ、あぶない）ではなく、「気づきの教育プログラム」（よりよい生き方のための気づき）の実践開発を通して、問題解決に寄与する意欲・関心・態度を向上し、少年問題への知識・理解を深めることを目的としていた。到達目標は、以下の3点である。第1に、少年問題・犯罪の実情について、深い知識理解がある。第2に、講師の方々の講義内容・実践を通して、実践的な問題解決を志向する意欲・態度がある。第3に、少年問題・少年犯罪の解決に向かう、実践的な自己教育課題を見いだすことができる。

概ね、目的及び目標を達成する内容であったが、外部講師として委ねられる領域であるが故に、学校現場における実践性について、学生の意識が高まりにくい領域でもある。さらに実践については、小中高の学校段階においても受講経験が少なく、学習者としての経験が乏しく、実践者としての経験は皆無の状況にある。目的のレベルを落とさずに、講義内容の定着を図る上では、オリエンテーションでの学習内容の焦点化や自己目標化をしっかりとさせる必要がある。

一方で目標については、少年問題の現状さえ十分調べていない実態にあることもわかった。講義内容で検挙者数や補導者数を知る実態にあり、目標1を「少年問題や犯罪の現状を理解し、基礎的な知識を獲得することができる。」とした方が学生の実態を加味した目標とすることができる。その「基礎的な知識理解」を基盤とした「課題解決のための実践的提案」という観点で評

価をすることが重要である。

### Ⅲ. 省察 2 ～内容～

講義では、愛媛県警察本部の少年サポートセンターを中心とする外部講師を招いているため、課題解決の基礎として「社会的コントロール理論」に基づく内容を中心とした。基本的には、「問題をいかに統制するか」という考え方に成り立っている。

第3回・第6回・第8回は、「割れ窓理論」「差別的接触理論」「社会的ボンド論」に基づく少年問題・少年犯罪の抑制の方法について学んだ。

第7回・第11回は、子どものソーシャルスキル育成に基づいた問題解決の在り方を学んだ。第5回はIT社会における少年問題の変容を理解した。

第10回は「問題」を抱えさせられた子どもたち、という観点で、児童生徒のライフヒストリー理解にたった生徒指導の必要性について学習した。

授業後の自由記述ドキュメントを分析すると、少年問題を考えるための理論（社会問題・逸脱）と非常勤講師や実地指導講師の内容をつなぎ合わせて考えることのできる学生は約3割程度であり、専門的学習と実践を関わらせて思考することには大きな課題がある。ここ3年間、このテーマを基に授業を行ってきたが、今回の省察で行っているように、社会理論と各回の学びについての整理が欠如していたため、学習者に浸透させることができなかった、と考えられる。次年度は学習内容・理論・実践の三つを焦点化する働きかけを行うことを目的としたい。

### Ⅳ. 省察 3 ～実践プログラム～

授業の学びを活かして、最終的な実践プログラムのポスター発表を行った。学習者個々の長所（専攻での学び）や関心を活かして発表が行われた。

昨年度まではグループでのプレゼンテーションによる発表を行ってきたが、グループ内での活動の偏りが見られたり、参考文献の収集や資料作成にも関わりの差が見られるなど、グループ学習を円滑にできない

班も存在した。そこで今回は、ポスター発表の形式を用いて、学習者個々のプログラムを構成させた。このことにより、学習者個々の関心や学びの高まりを総括的に評価することが容易になった。

ポスター発表の中で、明確に授業内容との関わりを表現できる学習者と、十分にできない学習者の二極化があった。これは、学んだ知識から理解を再編成したり、新たな知識を形成したりした過程を丁寧に描くことができない学習者の存在を示している。レポートや発表における思考過程の表現力の育成がカリキュラム全体を通して行われるべきかもしれない。

一方で、多様な参考文献や資料にあたって学びを向上させる学生も多々おり、それらの学びが授業を通してフィードバックされる必要がある。自由記述ドキュメントで「みんなの発表を聞きたい」というニーズがあったように、ポスター発表については、「発表すること」に重きを置きすぎ、それぞれの「発表を聞くこと」について十分な時間を確保することができなかった。この点が次年度への課題である。

### Ⅴ. 外部評価

授業における学生の発表は、EAT(愛媛朝日テレビ)の地方ニュースで取りあげられた(平成21年2月6日放送18時17分から10数分)。「あたたかい生活」を基盤として「全員が哀しい生活におちいらぬで欲しい」という願いで構成された実践プログラムが評価された。また、「1人で100人救うこと」ではなく、「100人で100人を救うこと」を目指した「小さな努力」による社会問題の解決を企図していることなどが高く評価された。

### Ⅵ. カリキュラム全体の問題として

大規模クラスの授業（実習の事前指導）において、外部講師や実地講師に適切に質問をしたり、意見を表明することが困難な実態を多々見かける。学習者が学びを深め、広げるためには、意欲化した学び方を引き出すことで、学部の教育力を向上させる必要があると感じる。